



お客01

猫博士の営むバーが高円寺にありました。猫の額とはよく云ったもので、カウンターはたった一席しかありませんでした。

カランコロンカラン。

今日も誰かがやってきます。猫博士の営むバーはチャージが100万円。月に1人でもお客がくれば、万々歳な店でした。

「猫博士...」

今日のお客は過去に数回、店を訪れたことのあるお客でした。

「やあ、やあ。」

猫博士はお客を迎えるなり、綺麗な綺麗な細工のされたグラスに水を30ml注ぎました。ただ、それだけです。

猫博士のバーには、お客が飲みたいと思う数百種類と云う水が、用意されているだけでした。

そんな馬鹿な！バーなのに水しかないなんてありえない。

多くの方はそう思うでしょう。ただの水に100万円のチャージ。それでも、猫博士は水以外の一切を、生涯提供しませんでした。猫博士曰く、バーは安らぎの場所。バーテンダーは優しさを提供する者。お客が欲しい答えを、答えてあげる。そして前に進める様に見守ってあげるのが良きバーテンダーだそうです。そして猫博士は今日どのお客が来るのか、事前にわかることができ、そのお客のために水を用意することができたそうです。

「お待ちしておりましたよ。」

薄暗い店内には猫博士とお客だけ。
静かな時間が只々流れるだけでした。

お客は水を一口呑み、猫博士の蝶ネクタイのあたりをぼんやり眺めました。

「お答えが、でたようですね。」

猫博士がお客にそう云うと、驚いたようにお客が猫博士の目をみつめました。

「答え...？私は何も困ってなんかいませんよ。」

お客は答えました。それが、答えでした。

「おやおや、それは失礼しました。」

たったそれだけの会話で、お客は100万円を払い、店を跡にしたそうです。
生前、猫博士が僕に教えてくれたたったひとつのエピソードでした。

「君は理解ができないだろう。」

猫博士は笑って、僕にそう云いました。

「私のしていることは誰にも理解されない。それでも私の元にやってくるお客はいる。理解される必要なんてないんだ。この店も。私も、私中心に回っている。世界は私を中心にまわっているんだ。誰だってそう、その人の人生なのだから。その人の人生は、その人が主役じゃなきゃいけないんだ。」

人生の主役を諦めたとき、人は死に至るそうです。

それとは逆に、人生を全うしたとき、その人の物語は終わるそうです。

猫博士が"博士"と呼ばれた由縁が、少しだけわかるような気がしました。

余談ですが、猫博士の店のチャージは、ツケでも賄えたそうです。

いつかその人が店にきて良かったと思えたときに、払える分だけ払えば、店には入れたそうです。

だって水しか提供しなかったのですから。